

# 弔 辞

田村 明さんを悼む

この書面は田村明さんが横浜市を舞台とした地方自治元年を築き上げた根源が  
どのような背景と経過に由来するかということに留意して記したものです

旧制静岡高等学校 昭和19年入学  
理科甲類3組 映友会同級生

小川伸一郎

2010/4/3

## 1. 田村君との出会いと静高時代

田村君との出会いは昭和19年4月1日に旧制静岡高校理科甲類3組に入り、仰秀寮の3寮に入った時に始まった。しかしお互い寮の両端の部屋に居合わせ、実際に言葉を交わす機会も少なかったことから、当初は彼を思い出す鮮明な記憶はない。寮生活について書かれた彼の自分史「東京っ子の原風景」の一節を引用し、入寮当初の風景を思い起こしてみよう。

“私は結核が再発しないように極力体力をセーブすることにした。まずは朝の全員集合には時間一杯極力遅く行く。そこまで少しでも床で休んでいる。同室の柘植は真面目だからずっと早く起きて、点呼の10分前に部屋を出て行ってしまふ。始めのうちは一生懸命に起こしてくれたのだが、いくらやっても私が起きないので一人で行く。

「なんて怠け者だろう」

と私のことを呆れていたに違いない。私はギリギリの時間には間に合うように、一番後から一人で校庭に駆けてゆく。もう全員整列しているから列の一番後につく。藁ぞうりを履いてぺたぺたと一番遅れて行く私のことを、友人たちは「のろまな奴だ」と思ったのだろう。しかしずっと後になって私と一緒に仕事をしたのは、社会人としてはテキパキものを裁いてゆくのびびっくりしたようだ。朝の集合にギリギリに行くのは、第一は体をいたわるため、第二はこんな軍隊まがいの寮生活へのささやかな抵抗だった。“

後日雑談時に本人から時々出てくるこの小話では、附言してこうも言っている。

“集合時間は破らないが、それ以上のこともしない。教師にとっては扱い難い生徒の類と映ったようだ”

と。この頃は未だ後々大車輪で仕事を遂行した田村明君の実像は見えてこない。

この「藁ぞうりぺたぺた」は彼のトレードマークとして私の記憶にも生きている。家元を離れ、お互い初めて寮生活に漬かり、軍国まがいの規律の中で生きることを余儀なくされていた生徒たちの実態でもある。

授業は1学年の終る昭和20年3月で終了し、東京出身者は以後各自家元に戻り、学徒動員されて川崎のいすゞ自動車で働くことになる。主に工作機械で自動車部品を削り出す仕事をやらされた。作られた部品は山をなしたが、それから3ヶ月半経った終戦時までこの工場から完成して出て行った自動車は1台もなかった。又終戦に近くなると工場の昼食後の集まりでは竹槍を使い、米軍と闘う模擬演習までさせられた。どうにも救いのない状態に陥って行ったのである。

いすゞ自動車で終戦を迎えた後世間は時計の停まったようになり、意外と静かだった。静高も暫くは閉校状態が続いた。私達は自宅待機を持て余し、クラスの級友宅に持ち回りで集まっては時局談義、哲学、進学等をだべり、思索を深めた。田村君もその中の一人だった。食べ物は貧しく戦後の耐乏生活は益々ひどくなってゆくが、空襲はなくなり、兵役もなくなり、自由と平和がこんなに有り難いことだという至福をしみじみ噛みしめたのである。

## 2. 大学の頃

彼は昭和22年東大第一工学部建築学科に入ったが、私は在学中これ以降は殆ど合っていない。彼の自分史「東京っ子の原風景」によると、学割を使った鉄道の無銭旅行に戦後の平和をしみじみと味わっていた。それによると

“建築学科を卒業後、建築そのものをしてゆく気にはなれない。もっと広いことをやりたい。そこで他の学部に行くことを考えた。経済学部の学士入学は4月以降になってからだという。法学部に聞くと学士入学というものはないから、入りたければ普通の試験を受けろという。卒業論文と卒業設計の合間を縫って法学部の受験勉強をした。この年が旧制高校卒業者の最後の試験で旧制高校浪人が溜まっていたのだが、運良く合格した。

その間に国家公務員の上級職試験を受けていた。高等文官試験がなくなって、人事院の国家公務員試験に変っていた。建築職と行政職を受けた。行政職とは新しい職種で、理科文科を問わずに広く行政に携わるものを求めていた。建築はもともとやる気はなかったのだが、一応受けてみた。それよりも行政職に私の求める未知の分野がありそうに思えた。とくに何も勉強はしなかったが、行政職は3万人ほどの受験者の中で合格者は9百人あまり、私は25番だった。やはり私に向いている方向は、理科文科と決め付けられない総合的な分野にありそうだ。

卒業したのは1950年。。。鉄道も好きだし、旅行が好きだった。当時の旅行を自動車で行くなどという発想は全くない。旅行は鉄道、海外なら船だった。そこで運輸省(現国土交通省)を希望した。。。私は大臣官房観光部計画課に事務官として所属していた。

。。。。。。。。。。

まだ時代は揺れていた。公務員の仕事は嫌いでないし、意義は感ずるのだが、権威主義とタテワリ主義は頂けない。特に私のように総合的な仕事をしたいと思っている者にとって、タテワリ官庁の縄張り主義には大いに疑問を感じていた。。。きっちりと法学部をやするために運輸省は1年半でやめた。

。。。。。。。。。。

私は運輸省を退職した後も、公務員試験の資格があるので、毎年のように国家公務員試験を受けた。。。法学部も法律学科と政治コースの2つを出ているから、今度は法律職をうけた。合格者中11番ということだった。行政職も受けたが12番だった。大蔵省、農林省、労働省などそれぞれ違う年に内定はしたが、長いところで2週間、いずれもすぐにやめた。。。役人はいち早く出世させてくれるのはよいが、一生やって行く仕事ではないと思った。それは私のやりたい総合性とは反するタテワリセクト主義で、権威主義的なものから抜けられないからだ。”

東大建築学科を卒業してから4年間に国家公務員の上級職試験を建築職と行政職の2つについてとり、運輸省を1年半勤め、法学部の法律学科と政治コースの2つを卒業し、上級職試験の法律職、行政職を再度取り、大蔵省、農林省、労働省と働く環境を見て回り、自分の望む仕事の有無と官庁の体質を見極めた。結果として公務員ではなく、民間人として働く決心

をし、大阪の生命保険会社に就職することとなった。そこでは不動産の管理、売買等にも携わり、誰にも負けない権威としてそこそこ仕事の評価も得られた。余暇も楽しみながら充実させていた。

最近この時代の彼の遺稿を発見した。これを次に記す。

#### “8. 遂に職業を見つける

昭和30年代も半ばになると世の中は高度経済成長を迎えていた。急激な都市化が進んでいる。そればかりか、今まで全く人のいなかった地域に突然ニュータウンが生まれ、海を埋め立て工業地帯が作られたり、日本列島は玩具箱をひっくり返したように、急激な変貌を続けていた。しかしそれらは巨大な開発ではあっても、総合性を欠いているし、画一的でしかも機能性に偏って街の個性や魅力にも欠けている。

地域づくりや、都市づくりは各専門家も各省庁も官民も協力した総合性を持つ必要がある。ところが総合的な考えをする人はいないし、当時の自治体にもまだその力がない。そこで総合的に地域づくりの計画を作り、それを進めるアドバイスをする地域や都市のプランナーが必要である。これこそが私の職業ではないかと思った。

たまたま雑誌をみていると、大学のときに丹下研究室の大学院特別研究生だった浅田孝さんが座談会でそんな話をしている。私は先ず卒論の指導教官だった丹下さんを自宅に訪ねた。丹下さんは高山英崑教授のところで助手にでも思ったらしいが、それを浅田さんが聞いていて、自分が会いたいと云っているということだった。

久しぶりに浅田さんにあった。ちょうど自分もそういうことを考えて小さな事務所を作ったところだから、ここでやらないかという話だった。開発センターという地域開発の計画調査をする事務所である。まだ民間でこういう事務所はない。。。。昭和37年12月に生命保険会社をやめた。8年9ヶ月勤め満36才だった。一年遅れたが地域・都市のプランナーとしてゼロ年生からスタートとすることになる。”

これだけ徹底した4年間の公務員職の調査やその後の民間人としての8年間の調査の末に、中央官庁でも民間企業でもない地方自治体を居場所として、まちづくりという生涯事業を創出することになったのである。

#### 3. 環境開発センターと横浜市再生計画

東京に戻って久しぶりの彼に私が会ったのは昭和40環境開発センターの銀座オフィスであった。彼は永年探し求めていた仕事を見つけたと云わんばかりに熱っぽく語りかけてくる。愛媛県の観光開発計画に取り組んでいて、仕事に没頭し、毎日2、3時間しか寝ていないとも。

“その頃横浜市長に当選した飛鳥田一雄氏が荒廃している横浜市を再建するプランをこの事務所に求めてきた。横浜は現に私が住んでいるばかりでなく、祖母、伯母、母もいわば横浜育ちだ。その仕事を与えられ、ついに横浜市に入り、職員として個性的な人間環境とするように、全力で仕事をするようになった。”

この横浜市再生計画においては方向性を言うだけではなく、将来の横浜の基本構造を整備しなければならない。その実現のために、次の6つを戦略的プロジェクトとして位置づけた。

1. 都心部強化事業（とくに現在のくみなとみらい21など）
2. それを実現させるための再開発用地としての金沢地先埋め立て事業
3. 乱開発防止のための積極策としての港北ニュータウン事業
4. 新しい自動車交通時代に対応する幹線道路事業
5. 横浜に欠けた都心と近郊地を結び拠点を育成する高速鉄道（地下鉄）事業
6. 都心をバイパスするとともに、ミナト横浜のシンボルとしてのベイブリッジ事業

“

請われて横浜市新設の企画調整局長となり、自らが陣頭指揮に立つ。持ち前のタフな交渉力と湧き出る豊富なアイデアの宝庫を武器に、盤根錯節の困難に遭遇しながらも一つ一つ立ちはだかる問題を解決し、実現にこぎ付けた。又まちづくりの先駆として全国自治体から遍く指導を頼まれ、同じ立場の人あるいはこれから地方自治を担ってゆく若い人たちに新たなまちづくり手法を説明し画期的な手本を示した。

後に横浜市を退官後、後進を育てようとして開かれていた田村塾に2,3度出席させてもらった。その時の話の内容は新しい商店街「馬車道モール」と宅地開発ラッシュに対処したユニークな「宅地開発要綱行政」であったが、立ちはだかる難問を絶妙な論理と自治体の圧力を巧妙に使う見事乗り切った話であった。田村君の英知の限りが随所々ににじみ出て非常に感銘深く聞かせてもらった。その一端を次に記そう“

#### 「馬車道モール」

横浜の関内にある商店街は占領のために活力を失っていた。これを元気づける施策が必要だ。。。。しかし漠然と補助金を交付しているだけでは何かイベントをやっておしまいだ。そこで企画調整局が声をかけて商店街をしばり、関内にある馬車道商店街をモデル商店街に選んだ。。。。一過性のイベントではなく、根本的に商店街を立て直す必要がある。ここでは地元「まち」を再生させる委員会を作らせた。六川英一という優れたリーダーがいた。その委員会に市側の企画調整局や経済局のメンバーも加わる。

議論の中心は市に依存するだけではなく、この機会に如何にして自分たちの力で馬車道を良くするかということである。お互いに様々なルールを定め協定を結んだが、これを敢えて「馬車道憲章」と呼んだ。「まち」の憲法だ。これにはハードもソフトも含む。憲章は銀行や証券会社も含めてすんなり合意し成立した。。。。。

ハード面ではまず歩行者空間を広げることだった。気持ちよく歩けなくては成り立たない。。。。そこで思いきって歩道の上の屋根を撤去して、青空にしてしまう。そして歩道を車道の側に1m広げ、又各自の敷地も改築などをする際には壁面線という制度で1.5m下

ってもら。協定は当事者間の約束だが、出来るだけ法令も使っておく。これで歩道の幅は特に費用を要しないで2.5m広がったし、せせこましい歩道の屋根も取れたので随分のびのびする。広がった歩道にはベンチやフラワーボックスをおいたり、彫刻や少しデザインされた文明開化調の電話ボックスを置いたり。車道と歩道の間にあったのは頑丈な鉄のガードレールだった。これも歩行者の楽しい雰囲気を壊すので、撤去してかわりに簡単な円柱状のコンクリートの低い車止めを置いた。。。。今は警察も考えを変えて随分と緩やかになって、さまざまな形の車止めを置けるようになった。

設置されている歩道の屋根を取って撤去するというのは画期的だったし、明るい商店街が生まれた。しかし「まちづくり」の基本になる道路交通は道路の問題を警察が全部取り仕切っていることは問題だ。〈市民の政府〉では少なくとも道路交通問題は主要な市町村が扱うべきだろう。

問題は表にはでないが、商店街の中にもあった。銀行、証券会社という大法人だ。ある会社から「建築基準法とこの協定とどちらが優先するのだ」と云ってきた。私は言下に「勿論憲章である協定が優先だ。建築基準法は最低限を定めたもので、その上に出来た協定だ。特別法では一般法に優先するという法理もある。そんなことを云わなくても憲章は商店街の全員が自分たちの手で合意して決めたものだ。自分たちのものとしてそれを優先させるのはあたりまえだろう。」結局はどこも協定以上のことをしてもらった。

#### 4. まちづくり塾

彼は誰も真似できない横浜再生というとても大きくプロジェクトを達成しながら、市長交代の余波を受けて13年間のまちづくりの戦場から退くことになる。しかし世の中は彼を見捨てなかった。法政大学法学部に教授として迎えられる。ここで彼はまちづくりの学を体系化し、東京と横浜の2箇所でもまちづくり塾を開いた。何れも月1回ずつ開かれ、もう10年を数えている。限なく記された実行のノウハウを図書として残すことに加え、この道を引き継いで更に地方自治を担ってゆく若者を育ててゆくことに並々ならぬ情熱を賭けていた。それが証拠に、彼が死の迫った昨年12月にこれだけは伝えておきたいと、入院の勧めを省みず酸素ボンベを携帯しながらこの塾の教壇に立った。自らが生きる為の手立ては後回しにしてもとの思いが先立ったのであろう。

#### 5. 終わりに

昨年来、彼の図書を読み出して気になる1文がある。それは

“横浜市宅地開発要綱は私が横浜市にいた10年間で学校用地だけでも当時の金で約3千億円の負担を免れたことになる。他のさまざまな点を加えれば、はるかに多額なものになるだろう。横浜市はそれだけ学校を建てられることは勿論、その余力を他の施設整備に当てることが出来た訳だ。”

彼のとても偉業の前にはここに創り出された金額は取るに足らぬものかもしれないが、だからと言って市の為政者や恩恵を受けた市民から感謝の意を表されたことがあったのだろうか？これを本人から聞きたいと思っていた。

時將に彼は最後の仕事と決めてあったまちづくり塾で伝えたいことを話し終え、自縛から放たれて奥様と伊豆の別邸に12/24に行くという。身体の酷使も限界に来ているので、正月の休みをその回復に当てられるなら大変いいことだ。期待したいと思った。しかしこれが生きて話し会える最後かもしれないという心のざわめきもある。急遽前日の12/23に電話した。

“10分でも15分でも会いたいのだが” 答えはNOだった。

“家内は明日出かける準備に忙殺されている。それをおいて会う訳にはいかない”と。

“それではこの電話で聞きたいが。君の行った横浜市への巨大な寄与に対し、市の為政者や恩恵を受けた市民から感謝の意を表されたことがあったのだろうか？”

彼の答えはこうだった。

“そんなものは何もない。しかしまちづくり塾で学び、これから地方自治の担い手として育って行きつつある人達がいる。この人達はその期待に応えてくれるだろう”と

私が彼の回復に掛けた祈りは外れ、1/26夜奥様から電話で訃報が届けられた。この1年何回と無く死線を彷徨っていた彼だったが、遂に巨星落つ！となったか。奥様もその覚悟はされていたようだ。不世出の彼ならばこそ、惜しみても猶尽きせぬ想いが残る。そして、まちづくり塾のみなさんからは即座に宣言されたお別れ会企画の発表を聞き、少しは救われた思いである。

合 掌